

氏名	佐藤容子
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第178号
学位授与年月日	平成22年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉團伊玖磨作曲 歌曲集《わがうた》 他 〈論文〉音声化による発展的な詩の理解 — 團伊玖磨の歌曲集《萩原朔太郎に依る四つの詩》を通して—
論文等審査委員	
（総合主査）	東京芸術大学 教授（音楽学部） 永井和子
（副査）	〃 准教授（〃） 吉田浩之
（〃）	〃 〃（〃） 杉本和寛

（論文内容の要旨）

従来、歌曲について深めようとする時、第一に詩や作曲された背景を探り、第二に音楽の分析を行うことが、歌い手であれば基本的に辿る行程であろう。しかし、團伊玖磨の歌曲集《萩原朔太郎に依る四つの詩》は、その行程を辿っただけでは、納得のいく理解を得ることは難しい。そこで私は、歌曲集の詩を理解するためのひとつの方法として、詩を音声化することを実践した。即ち、音楽を抜きにして声に出して読む「詩の朗読」である。従来の行程に加えて、縦書きの詩の「黙読」を通り、音楽を抜きにして声に出して読む「朗読」の行程を挟むことで、詩の理解が豊かになることを導くのである。

歌い手とは、言葉を語る楽器であると言える。私たちは、楽譜に描かれた言葉の世界を、自分の体を通して聴衆に伝える「橋渡し」の役割を担っている。故に、歌い手にとって詩の理解は不可欠であるが、さらに重要なことは、作曲家がどのように詩を読み、何を音に描いたのかを紐解くことである。それが母国語である日本語の場合、各々が詩から受ける情感は様々であるため、ともすれば自分の感覚だけで表現に結びつけてしまう可能性があるだろう。したがって日本歌曲においては、作曲家がどのように詩を読み、何を表現したかを掘り下げることが重要な作業であると考えている。

私は、この歌曲集《萩原朔太郎に依る四つの詩》をこれまでに3度ほど舞台上で歌う経験をしているが、その時々で納得のいく路線は見つけてきたものの、ずっともどかしさを残したままであった。そのもどかしさは、詩の難解さと、それ故の音楽の複雑な構造にある。そこで私は、兼ねてからずっと頭の中にあったこの歌曲集において、團が思い描いた歌曲集の真髄を見出したいという強い願いから、本論文の着手に至ったのである。

本論文は4章から成る。第1章では、歌曲集《萩原朔太郎による四つの詩》の作曲の背景を固めるための考察を行う。第2章では、原詩の背景を掘り下げ、続く第3章では、縦書きの詩を見つめる黙読の意味を考えた後に、声に出して読む朗読をすることによる詩の理解の発展性を述べる。基本的な朗読の要素を考え、さらに、私が考えた独創的な詩の読み方によって発展的な詩の理解を目指す。本論文の最終課題である第4章では、作曲家・團伊玖磨が辿り着いた萩原朔太郎の精神世界を紐解いていく。即ち、第1章から第3章までの積み重ねが、楽譜の分析を滑らかで豊かなものにし、その大きな結果として、團が意図した歌曲集の内面を、鮮やかに浮かび上がらせる結論を導くのである。

音楽を抜きにして言葉を体の中に染み込ませる詩の朗読を行うことにより、詩の解釈は、とても充実したものとなる。語句の解釈からいきなり歌唱へ向かうのではなく、朗読というプロセスをその間に挟むことで、詩を解釈・解析する意欲も高まり、詩に対しての感覚がさらに深まっていくのである。また、

詩を朗読することによって、日本語が本来持つ速度や音色にも心を寄せることができる。このことは、歌唱の面においても新たな可能性を示唆している。

このような、縦書きの詩を黙読する意識と、声に出して詩を読む朗読は、歌曲に取り組む時の一つのアプローチとして、今後の発展が期待される重要なものである。この研究によって、詩歌として原詩から受ける情感と、そこに作曲家の精神が反映され、音楽が付随された詩の両方を受けて、歌手は初めてその歌の世界観を表現できるということを明らかにする。

(総合審査結果の要旨)

[演奏] 全て團伊玖磨作品によるプログラム。まずスタートとなった歌曲集〈ジャン・コクトーに依る八つの詩〉、申請者の明るく艶やかな声が、堀口大学の手になる軽快で上品な日本語の世界を表情豊かに描いていた。「旅上」においても明解な日本語が素晴らしい。また、ソプラノではあるが中・低音の豊かさが魅力の申請者は、歌曲集〈わがうた〉、歌曲「小諸なる古城のほとり」において、しっとりとした味わい深い表現力で会場の空間を満たす。終曲となる歌曲集〈萩原朔太郎に依る四つの詩〉は、論文研究の対象とした曲だけあり、難解な朔太郎の詩の世界を独自の朗読法により裏付けされ、格調高く歌い上げて見事である。どの曲も集中力のある明晰な日本語で水準の高い演奏であるが、全般に亘り高音域の響きに柔軟性が欲しい。中・低音域の素晴らしさがあるだけに高音域での表現が画一化してしまう事が非常に残念である。また、情緒的な感情表現の際、内にもってしまいがちだが、声になる世界での存在の仕方を身につけたい。今後の課題であろう。またこの日、申請者にとっての最大の収穫は素晴らしいパートナーを得た事である。歌曲集のような場合、曲の進め方はピアニストの感性によるところ大である。ピアニストの曲間の生きた運びは、曲集の完成度として質を高めていた。

[論文] 歌曲に取り組む際のアプローチの一つとして、朗読の重要性を説いている。詩を理解する上で、黙読を経て声に出して「どう読むか」、それは歌手として「どう歌いたいか」につながる曲の理解の土台となる為のものとし、音声化することでより発展的な詩の理解を得るための方法を見つめている。その為一般の「朗読法」を説くものではないとし、歌手の立場に立って、目的がはっきり提示されている。大学院時代からの長年に亘り日本歌曲と向き合ってきた申請者が、しっかりとした研究姿勢を持ち、独創的な朗読法を展開していて興味を惹く。ここでの論が全ての歌手に通ずる事ではないにしろ、演奏者の立場からの一つの提言と成り得る。また、難解な萩原朔太郎の詩の読み解きにおいても深い研究心によって引き出されてきた道筋が見え、労作である。